子もみられる．こうして多くの人が広いネットワークで互いに関わり合い生きていくことは，異文化との接触機会といえる．そしてそれは，互いの文化や考え方に影響を与える機会である．そこで新たな文化や考え方を取り込み，培ってきた文化にそれらを反映させることができれば，それは文化の発展ともなるのだ．だがそのためには，自分たちの足で自律的にしっかりと前進するための環境が必然である．その環境は，皆で作り上げるものであることを，我々は忘れてはならない．

引 用 文 献

Bangkok Post. 2019.〈https://www.bangkokpost.com/thailand/special-reports/1631922/wake-up-and-sell-the-coffee〉（2019 年 2 月 20 日）

Renard, R. 2019.〈https://www.unodc.org/documents/alternative-development/Final_Published_version_Mainstreaming_AD.pdf〉（2019 年 8 月 19 日）

同じ釜の飯を食う

高村（井上）満衣 *

滞在先の女性教師サラ

「この村の子どもは素行が悪い．うちの子どもたちには外で遊んでほしくない．」そう私に語ったのは，この村の小学校で働いている女性教師サラ [1] である．私は 2016 年からタンザニア西部キゴマ州のある村で，現地の小学生を対象に調査を行なってきた．調査をはじめた当初，私はこの村に住むサラの家に滞在させてもらっていた．サラには，4 人の子どもがいる．1 人はすでに高校に上がり寮生活をしているため，同居しているのはキゴマ州出身の夫，義理の母，そして 3 人の子どもである．彼女は 500 km ほど離れた北部のシニャンガ州出身で，教師として赴任するまでこの村どころかキゴマ州に来たこともなく，親戚もいない．タンザニアの教師が公立学校で働く場合，政府が学校を指定する．そのため，サラのように縁もゆかりもない地に行くことがしばしばある．

私がタンザニアの他の地域の人に「キゴマに行く」というと，よく「ムチャウィ（*mchauwi*）に気をつけろ」と注意された．ムチャウィとは邪術師のことで，キゴマに多いといわれている．調査村の人たち自身にも，私の調査している小学校に，夜になるとムチャウィたちが集まるので，絶対に行って

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1）以下，出てくる教師の名前はすべて仮名である．

はならないといわれたくらいだ．そのようなわけで，サラもキゴマに赴任が決まると，親戚中から反対をうけたそうだ．しかし，一度赴任校が決まると変更の希望は通らない．彼女は自分の仕事を全うするため，家族の反対を押し切ってキゴマに来たのだった．

ヤシ油が食べられない教師

小学校には，給食の時間がなく，多くの子どもたちは終業時間にあたる 14 時半以降に一日の初めての食事をとる．一方，教師には，午前 10 時前後にママチャイ（*mama chai*）と呼ばれる女性が朝ご飯を売りにくる．飲み物に関しては教師がお金を出しあって自分たちでチャイ（お茶）を淹れるが，食べ物は各自持参するか，ママチャイから購入する．ママチャイが料理するものの中にマハラグウェ（*maharagwe*）という豆のシチューがある（写真 1）．タンザニアではよく食べられる料理であるが，地域によって違いがあり，タンザニア沿岸部ではココナッツミルクを加える．一方，キゴマではヤシ油を使う．都市に出て「ヤシ油が恋しい」といっている人はキゴマ州出身だと分かってしまうといわれるほどの郷土食材である．ヤシ油は鮮やかなオレンジ色をしているため，使用した料理は色で分かるうえ，独特な味と香りがある（写真 2）．

ある日，職員室で教師とともにママチャイの持ってきた朝ごはんを食べていると，サラにヤシ油のマハラグウェを勧められた．彼女から料理ポットを受け取ると，女性教師マリアに止められた．「マイには，こっちのポットのマハラグウェの方がいいよ」と彼女は手元にあった別のポットを渡した．ママチャイが作るマハラグウェには，ヤシ油を使ったものとヒマワリ油を使ったものの 2 種類あり，マリアが勧めたのはヒマワリ油のものであった．どちらでもいいと答えると，マリアは「ヤシ油は食べられないわ．匂いがきついし，私には味が合わないわ．ヤシ油が食べられるなんて，マイはキゴマの人ね」と笑いながらいった．マリアのように，ヤシ油が食べられない教師の要望で，ママチャイは 2 種類を作るようになったようだ．

マリアは北部のアリューシャ州出身で，2

写真 1　マハラグウェとご飯

写真 2　アブラヤシを熱してヤシ油を作る

年前までムワンザ州の学校に勤務していた．しかし，夫の仕事の都合でキゴマ州に移ってきたばかりであった．彼女は，キゴマの町から通える範囲内で勤務するため，自分の学校と勤務地を交換してくれる教師を探したとのことだった．キゴマに慣れていない彼女は，ヤシ油を全く食べることはできない．彼女のみならず，キゴマで長年働いている男性教師カッシームも，「20 年以上経っても，ヤシ油の香りは苦手だ」という．調査校の教師は他の地域出身者が半数以上を占めている．その土地の食べ物に慣れていない教師は多い．教師は数人を除き，学校がある村には住まず，町から通っているため，地域の人と交流することも少ない．マリアは，「ここの村の子どもは振る舞いが悪い．自分の出身地では，彼ら彼女らのような行動は親が許さない．だけど，ここの親は全く子どもたちを気にしない．子どもたちを叱ることがない．教師にしつけを任しているのよ」と，私によく愚痴をこぼしていた．子どもたちについての話が，最後は村の人々への批判になることも多かった．

同じ釜の飯を食う

一方，サラは学校がある村に住む．この村の学校に赴任した際，キゴマの町に住む選択もできたが，彼女は学校がある村に住むことを選んだ．彼女が不便な村を選んだ理由は，学校からの距離であった．「どんなに便利でも，学校から遠いと意味がない．朝早く起きるなんていやよ．近いに越したことはないわ」と彼女は語った．「あの市場の上のところに住んでいたの．隣のおばあさんがよく世話をしてくれたわ．ヤシ油の料理も彼女に作ってもらっていたのよ．最初は苦手だったけど，だんだん慣れていったわ．私にとってのキゴマのママよ．」彼女の口から好意的な村の人の話を聞いたのは初めてだった．「ママは，この村での暮らし方を教えてくれたわ．彼女がいなければ，私はここにはいないわね」，「ヤシ油で料理をするようになって，私はキゴマの人になったと言われたわ」と彼女は優しく笑った．キゴマ州出身の夫との結婚がきっかけで，ヤシ油の料理を作り，食べるようになったのかと思っていたのだが，そうではなく，この「キゴマのママ」との出会いがきっかけであった．知り合いのいない土地でひとり村に入り，村の人たちと同じヤシ油の料理を食べ，一緒に暮らしはじめた．彼女のこの村での一人暮らしの思い出が優しい表情を生み出したようだった．

しかしサラはいまだに，自分の子どもたちが近所の子どもと遊ぶことをよく思っていない．彼女自身，この村で密に交流しているのは，教会関係の人々のみである．他の教師と同様，この村の子ども，そして大人たちへの愚痴も多い．私にも，他の家で食事をすることを「病気になるかもしれない」といって止めたりする．ムチャウィの存在を信じている彼女は「呪いをかけられるから危ない」ともいって，彼女の家で食事をするように勧める．また，休日は家で過ごすようにいう．彼女の眼にうつるこの村にどのような変化があったのだろうか．「キゴマの人になった」といわれた彼女は，それでもこの村を悪くいう．そこには簡単に割り切ることのできない

感情の交錯がみえる．

私も彼女のようにひとり，この村に入って食事をし，自分の眼でこの村を見てきた．彼女は私を止めたけれど，私はその後，この村の小学生の家に移り住むことにした．同じ鍋のヤシ油の料理を食べながら，私はこれからこの村の人たちに，どのように溶け込んでいくのだろうか（写真 3）．

写真 3　滞在先でご飯を食べる

タイにおける大学での仏教教育

泉　向日葵*

2019 年 1 月 1 日，私はタイ北部にあるチェンマイ県で新しい年を迎えた．近年の私の年越しは，ごく一般的で定例化していた．31 日夜に年末番組を深夜まで鑑賞し，年が明けた 1 日はコタツの中で年始番組を鑑賞する．そうして迎える新年を数年経験してきたが，今回はこれまでの人生で最も印象深い年の始まりとなった．2019 年最初の日，私は友人家族に連れられある場所に向かっていた．

タイの宗教

研究対象国の宗教が何であるか．これは研究内容に関係なく存知すべき情報のひとつである．タイにおいては国民の 9 割以上が仏教徒であり，国王も仏教徒でなければならないことが憲法に定められているほどである［日本タイ学会 2009: 24］．タイに滞在していると，あらゆる機会で仏教国であることを痛感する．たとえば，首都バンコクの高架鉄道（BTS）の優先座席の表示には，妊婦や老人同様に僧侶が対象となっている．また街を歩けば，至るところにワット（寺院）が建立されており，その数には驚かされる．では国民の大半が仏教徒であるタイでの仏教実践はいかなるものか．

そもそもタイの上座仏教は二重構造をもつとされる．ひとつは，特権的な出家者のみに

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科